

# 第二次世界大戦における連合・統合作戦<sup>1</sup>

## —英米を中心に—

ウィリアムソン・マーレー

英米の連合軍による戦略レベルでの統合作戦は、第二次世界大戦で枢軸国を決定的に敗北させる上で大きな効果をもたらした<sup>2</sup>。同様に、英米軍内の統合作戦能力の展開は連合軍の勝利に大きく寄与した。英米両国は第二次世界大戦の勃発直後、複雑かつ困難な戦略上の統合作戦の諸問題に対し、有効な対応策を創出するのに多くの困難を強いられた。結果として連合軍の政治・軍事指導者たちは、戦略と作戦の遂行に対し、まさに統合作戦的アプローチを展開する必要に迫られた。そして各軍種も同じく統合作戦を効果的に遂行するための概念や組織体系を考案しなければならなかった。どちらも時間と労力を要した。

開戦してからの数年間、連合軍の陸海空軍は軍事力を最大限に発揮するよう連携・協力するのに苦戦した。実際、多くの軍事史家はこの時期の英米の連合戦略及び両軍内の統合作戦の遂行における様々な困難や不和を指摘している<sup>3</sup>。それにもかかわらず、この凄惨な戦争を通じて遂行された英米軍の連合・統合作戦は、日独伊3カ国の枢軸国のそれらとは際立った対照を見せることとなった。

英米軍の全容を振り返る前に、枢軸国に関していくつか言及しておきたい。第一に、枢軸国3カ国の世界秩序の転覆を目的とした取り組みが推進される中で、連合軍に向けた努力がなされたとは到底言えない<sup>4</sup>。1940年6月に、ベニート・ムッソリーニ率いるファシズム体制のイタリアが英仏に宣戦布告した際、イタリアはドイツの要求にほとんど関心を

<sup>1</sup> 本稿ではアメリカでの連合・統合作戦の用語の定義を使用する。前者の統合作戦とは、同盟国か否かを問わず二国間の協力による軍事作戦を指す。後者の統合作戦とは、陸海空軍が戦術または作戦レベルで協力する軍事作戦を指す。

<sup>2</sup> Gerhard Weinberg, *A World at Arms, A Global History of World War II* (Cambridge, 1994) は、英米の連合作戦遂行における両国間の複雑な政治的・戦略的なやりとりを詳述している。

<sup>3</sup> これに関しては、David Irving, *The War between the Generals: Inside the Allied High Command* (London, 1982) を参照。

<sup>4</sup> 枢軸国は連合軍戦略においてさえ、総じて互いに行き違いがあった。著名な軍事史家デイヴィッド・リチャーズ将軍が独伊軍の戦略的協力について指摘しているように、「地中海における高次元の軍事方針——大戦略——は、概ねヒトラーとムッソリーニの話し合いで決定され、彼らはそれぞれ過剰なほどに従順な軍事顧問たちに取り巻かれていた。一例を挙げると、ドイツ国防軍最高司令部 (OKW) とイタリア軍最高司令部 (Commando Supremo)

払っていなかった。むしろイタリアはドイツからの支援なしでイギリスと「並行戦争 (parallel war)」を行えるという戦略的前提に立っていたようだ。もっとも、開戦直後の 1940 年秋に訪れた悲惨な結末 (ギリシャとエジプトでの敗北に加え、イギリス軍雷撃機の空襲でタラントのイタリア軍戦艦の多くが撃沈) により、この幻想は打ち砕かれた<sup>5</sup>。

結果として、イタリアは枢軸国内での首位の座をドイツに譲り渡すこととなり、ヒトラーはドイツの重要な決定事項をイタリアとの事前協議なく一方的に伝えるようになった。ムッソリーニの娘婿で外務大臣を務めたガレアツォ・チアノ伯爵は、1940 年秋のヒトラーのルーマニア侵攻に対するムッソリーニの反応を以下のように記録している。

しかしながら、彼 (ムッソリーニ) は何にもましてドイツのルーマニア占領に憤慨している。彼は、誰もこの事態を予測していなかったことから、イタリアの世論に極めて深刻な悪影響を与えるというのだ。「ヒトラーはいつも私に既成事実を突きつけてくる。今度は私が向こうを同じ目に遭わせる番だ。ヒトラーは新聞を見て、イタリアがギリシャを占領したと初めて知ることになるだろう<sup>6</sup>。」

また、日本では広く知られているように、日本とドイツの戦略的調整にも同様の傾向が見られた。ヒトラーはドイツのソ連侵攻を実際に開始した後によく、バルバロッサ作戦を極東の同盟国である日本に伝えた。その返礼として、日本政府は真珠湾攻撃を実行した後でドイツに伝えた。これ以後も両国政府は、自国の大戦略をまるで双方が別の惑星に住んでいるかのように、それぞれ独自に遂行した。

さらに、統合作戦の分野でも、事態はさほど変わらなかった。1940 年 7 月のカラブリア沖海戦に参加したイタリア空軍は、敵艦 2 隻を海軍との連携なく爆撃した。1940 年末の戦況の悪化後、1942 年のイギリス軍とのマルタ島攻防戦での空海軍の協力においてのみ、イタリアの空軍 (*Regina Aeuronautica*) と海軍の間に協力の兆しが見られた。戦術的で迅速な戦場展開を重視するならば、統合作戦においてドイツの方がはるかに巧妙だったのは驚くべきことでない。

---

の間には、相互協力のための正規ルートが存在せず、定例的な意見交換や話し合いの場もなかった。定例的な会合として、イタリア軍最高司令官カヴァレロ元帥がヒトラーの地政学的な演説を耳にすることはあったが、戦略的協議と呼ぶには程遠いものだった」David Fraser, *Knight's Cross, A Life of Field Marshal Erwin Rommel* (New York, 1993), p. 225.

5 独伊軍の連合作戦へのアプローチについては、特に MacGregor Knox, *Mussolini Unleashed, Politics and Strategy in Fascist Italy's Last War* (Cambridge, 1982) を参照。敗北の大きな原因となった軍事的不全については、MacGregor Knox, *Hitler's Italian Allies: Royal Armed Forces, Fascist Regime, and the War of 1940-1943* (Cambridge, 2009) を参照。

6 Galeazzo Ciano, *The Ciano Diaries* (New York, 1946), p. 300.

しかしながら、ドイツの統合作戦で一番の見せ場となるはずだった1940年4月のノルウェー侵攻において、3軍種による協力はわずかにとどまった。地上軍への戦術的支援に関して、ドイツ空軍(Luftwaffe)は少なくとも1942年夏まで連合空軍の地上軍支援能力をはるかに上回っていることを示していた。それにもかかわらず、大西洋での戦いではドイツ空軍と海軍(Kriegsmarine)の間に協力関係はほとんど存在しなかった。これもまた日本で広く知られていることだが、太平洋での戦いでアメリカ軍の反撃が提起した日本軍の戦略・作戦上の諸問題に対する解決策を講じる際に、日本海軍と航空部隊の軍種間協力は行われなかった。むしろ海空両軍は相互の疑念を捨て切れず、インテリジェンスの共有にも消極的で、両軍種がそれぞれ全く異なった戦闘を展開するような作戦方針にこだわった。

## 連合作戦：英米の経験

次に、連合が実践した連合作戦に目を向ける。なお、この考察にはソ連を含めない。ソ連と西側諸国の協力という観点で連合作戦を単純に論じることはできないからである<sup>7</sup>。英米両国は1941年6月22日のドイツのソ連侵攻から第二次世界大戦の終結まで、ソ連に大量の軍事的・経済的援助を提供してきたにもかかわらず、ソ連と西側諸国との連合作戦は実現しなかった。むしろソ連は英米両国が欧州第二戦線を開かず、1940年5月のドイツのフランス侵攻を指一本動かさず傍観したことに不満を漏らし続けた。それゆえ、連合の遂行した連合作戦に関する考察は、英米両国が実施した複雑かつ困難な作戦をめぐる議論に限定される<sup>8</sup>。

はじめに、英米両国とも第一次世界大戦でドイツを敗北させた連合国として連携・協力した経験が存在した。フランスのフェルディナン・フォッシュ陸軍元帥の指揮下で、英米仏に有効な軍事同盟を成立させるまでには実に4年もの歳月を費やし、また1918年春のルーデンドルフ攻勢において連合が絶体絶命の危機に晒されたという共通の経験も必要

<sup>7</sup> 米ソ間で協力関係が構築された唯一の例は、1944年8月、ソ連との極めて長期の交渉を経て、第8空軍がB-17爆撃機でドイツ上空を通過してソ連まで往復飛行し、途中で爆撃を実施して、ソ連領内に着陸した作戦である。しかし、ドイツ空軍はアメリカの思惑を未然に察知し、B-17爆撃機の大半を、イギリスの航空基地に帰還する前に地上で撃破した。

<sup>8</sup> オハイオ州立大学のピーター・マンズール教授と筆者は先日、歴史上、様々な同盟体制の下で実施された連合作戦と大戦略の遂行との関連性に関する論稿を執筆した。この論稿は現在、ケンブリッジ大学出版会の査読を受けている。

であった<sup>9</sup>。さらに、第二次世界大戦中の英米両国の指導者たちは第一次世界大戦中に各国政府内の要職に就いており、ウィンストン・S・チャーチルは海軍大臣を経て軍需大臣、フランクリン・D・ルーズベルトは海軍次官を務めていた。したがって英米両国の指導者は、戦時の連合作戦を避ける方法や、各国の戦争目的の違いがもたらす戦争への圧力や諸問題の下で同盟国と協力する最善の方法を概観できる立場にいた。

第二次世界大戦における英米の連合作戦の契機は、1940年5月から6月にかけてのフランス崩壊であると言われる。次第に絶望の色を濃くするフランス戦線の状況を前にして、チャーチルはアメリカに接触した。今振り返れば、戦略的情勢は当時思われたほどには危機的ではなかった。しかしながら、アメリカの軍事問題に関する識者の大半は、イギリスがドイツ国防軍（*Wehrmacht*）および空軍の攻撃に耐えられるとは考えておらず、他方でチャーチルは国内で、ドイツとの交渉により戦争を終わらせるべきだとする多数の保守党議員たちと対峙していた<sup>10</sup>。チャーチルが一体どの時点で、イギリスが戦争を続ける場合にアメリカの支援を期待できると判断したのかは明らかでないが、私自身の推測では1940年7月のメルセルケピール海戦におけるイギリス軍によるフランス艦隊への攻撃が、チャーチルの奮闘によりフランス海軍を国際政治の勢力均衡の場から退場させただけでなく、イギリスは戦争を継続するというルーズベルトへの明確な合図だったのではないかと考える。

ルーズベルトがイギリス軍によるフランス海軍への攻撃をこのように解釈したのは確かであろう。ルーズベルトは彼の軍事顧問とは異なり、イギリスはアメリカにとって防衛の第一線であることを理解していた。それゆえ、たとえアメリカのイギリスへの援助が自国の軍事装備にどれほど深刻な影響を与え、そしてアメリカの切実な軍事力の要求を損なうものであろうと、イギリスには可能な限り最大限の援助が必要であった<sup>11</sup>。他方、ルーズベルトは軍事顧問の意見を退けることで大きな政治的リスクも負った。当時ルーズベルトは3期目の大統領再選を目指す選挙戦の最中であった。この決断によりアメリカの戦争介入に向けた着実なアプローチが生まれたのである。

こうしたアメリカの対応の遅さに、チャーチルはたいそう不満であった。しかしルーズベルトは極めて優秀な政治家であり、アメリカ国内の孤立主義と介入主義をめぐる世論の分

<sup>9</sup> 英仏は協商国としての同盟関係であったのに対し、アメリカは連合国であった。軍事的にフォッシュは連合国の軍隊を指揮する立場になく、フランス軍司令官のアンリ・ベタン陸軍元帥は必ずしもフォッシュの命令に従う意思を見せなかった。

<sup>10</sup> 一部の歴史家はヒトラーと取引すれば大英帝国を救えると主張していたが、これはナチス政権に対する見識が皆無の学者たちに支持された馬鹿げた言説である。

<sup>11</sup> 戦争中のアメリカの戦略に関する優れた考察として、Peter Mansoor, "American Strategy in the second world War," in Williamson Murray and Richard Hart Sinnreich, *Successful Strategies: Triumphant in War and Peace from Antiquity to the Present* (Cambridge, 2014) を参照。

断をどの程度まで容認できるか正確に理解していた。そして日独両政府の愚行（戦略的に無謀な日本の真珠湾攻撃によりアメリカ国民は結束し、その4日後にヒトラーがアメリカに宣戦布告した）を受けて、アメリカは孤立主義を捨てて1941年12月に参戦した。

英米両国は最終的に同盟を結んだものの、戦後世界に向けた両国の戦略的狙いは全く異なっていたという事実を見落としてはならない。ルーズベルトは、宗主国が植民地支配を断念する時期が来ていると強く感じていた。他方でイギリスにとっては、大英帝国の維持が本来的な戦争の目的であった。チャーチルが1942年に述べたように、彼は英大英帝国解体の指揮を執るために首相になったわけではなかった。それにもかかわらず、この意見の相違によって、英米両国の政治・軍事指導者の中で日独撃破に向けた協力への意志が妨げられることはなかった。

英米両国による最初の連合作戦は太平洋で展開され、マラヤ・蘭印防壁を堅守する目的で遂行された。当時、英米両国が日本軍からこの防壁を防衛するための戦力構成は完全に欠如しており、土壇場で軍司令部が設置されたほどだ。そして作戦の計画策定・実行に携わったほぼ全員が、陸海空での日本軍の卓越した不屈の精神と高い能力を過小評価しており、その結果として容赦ない被害を受け、マラヤ、シンガポール、ビルマ、蘭印、フィリピンは全て日本の電撃作戦の前に屈した。数カ月のうちに、東南アジアでの連合作戦は完全に崩壊した。

それ以降、太平洋はアメリカの戦域となり、協力的な作戦計画や連合作戦の必要性はほぼなくなった。例外は中国・インド・ビルマ戦域（CBI）であり、この戦域でイギリスはマラヤとシンガポールの奪還に向けた第一歩としてビルマ奪還を目指した。他方でアメリカは、この戦域での軍事作戦を、あくまで中国への陸上補給ルートを開設するための手段と見なし、ヒマラヤ山脈を超える空路での補給の活用を目指した。アメリカは大英帝国のビルマ奪還に何の興味もなかったのである。

アメリカはまた、中国本土にB-29爆撃機の前線基地を確保するという全く非現実的な期待を抱いていた。第二次世界大戦の最後の年までに、アメリカは中国・インド・ビルマ戦域への関心をほとんど失っていた。これは中国国民政府の総体としての政治的・軍事的な機能不全に加え、中部太平洋作戦でマリアナ諸島を攻略し、B-29爆撃機による日本本土への急襲を行う上で、はるかに効果的な基地体制が整備されたためである。結果として、ウィリアム・スリム陸軍元帥率いる第14軍の卓越した方面作戦は、大英帝国のビルマ奪還を象徴するものとなった<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> スリム元帥の回想録 *Defeat into Victory* は、その誠実さと表現方法のみならず軍人という職業への洞察において、軍事史における偉大な古典のひとつである。筆者がこれより高く評価する著作は、ユリシーズ・S・グラントの *The Personal Memoirs of U.S. Grant* だけである。

他方、欧州と大西洋の戦域では、時に不調和も生じたが、英米両国の連合作戦が功を奏した。とりわけ連合国の勝利に決定的に重要となったのは、大西洋よりも欧州においてであった。ニューファンドランドのプラセンタ湾で行われた第 1 回英米首脳会談で、両国首脳と参謀たちは、アメリカ参戦後の「ドイツ第一主義」戦略に合意した<sup>13</sup>。しかし現実には、太平洋戦域での戦力強化が逼迫していたことから、「ドイツ第一主義」戦略の実行ははるかに困難であることが判明した。

1942 年の大半は欧州での英米連合作戦の運用方針の協議に費やされた。アメリカは当初、1943 年にフランス北部沿岸への大規模な上陸作戦を実行するよう強く主張していた。この戦略的発想には、絶望的な戦況にあると思われたソ連を支援する狙いがあった<sup>14</sup>。これに対してイギリスは、1940 年の経験や北アフリカでの困難な状況を踏まえ、ドイツ軍最強の防衛拠点を攻撃する意志はなかった。1942 年 8 月のディエップ上陸作戦（イギリス軍が計画してカナダ軍が遂行したため、文字通りの連合・統合作戦）は悲惨な結果に終わったものの、唯一の救いは、ドイツ軍が精鋭部隊を配置している沿岸地域に上陸作戦を遂行するための連合国の準備不足が、明確に浮き彫りになったことである<sup>15</sup>。

結局、チャーチルは 1942 年 7 月にモスクワへ飛び、同年初めにアメリカが約束した内容に反し、年内に欧州第二戦線を築くことはできないとソ連に報告しなければならなかった。そして必然的に、仮にフランス北部沿岸への上陸作戦を実行しない場合、ソ連に対するドイツの軍事的圧力を緩和するために西側諸国がどのような行動をとるかが問題となった。すでに英米両国は「ドイツ第一主義」戦略に合意していた。ルーズベルトとチャーチルは、エルヴィン・ロンメル陸軍元帥率いる独アフリカ軍団 (*Afrika Korps*) のエジプトでのイギリス軍への軍事的圧力を緩和するため、北アフリカへの上陸作戦を決行した。アメリカはそれまでに何度か北アフリカ・地中海の戦いでイギリス軍を支援する明確な姿勢を見

<sup>13</sup> かつて多くの歴史家が、米軍は開戦当初の 2 年間、「ドイツ第一主義」戦略を遂行できなかったとし、その理由を 1942 年にはアメリカ軍兵力の多くが欧州や北アフリカよりも太平洋に配備されていたこと、そして 1943 年には欧州と太平洋の兵力分布が均衡していたためだと論じた。しかしこの主張は「ドイツ第一主義」戦略がかなりの程度、日本の軍事的力の過小評価に基づいていたという事実を見落としている。結果として、ルーズベルトは政治的理由（つまりアメリカの国内世論）だけでなく軍事的理由からも、開戦前に想定された以上の戦力を太平洋に投入せざるを得なかった。

<sup>14</sup> 結局のところ、ソ連は 1940 年 5 月から 6 月にかけてドイツ軍が西部戦線を突破するのを傍観していた。スターリンの外務大臣（外務人民委員）を務めたモロトフは、1940 年 6 月中旬のドイツ国防軍の輝かしい勝利に対し、駐ソ大使へ祝辞を述べたほどだ。その 1 年後にドイツから宣戦布告を受けたモロトフ外相の悲しみに満ちた「我々は宣戦布告に値するどんなことをしたのか」という発言は、ナチス・ドイツの外交政策の嘘偽りを物語るものである。

<sup>15</sup> 上陸部隊が、補強された港湾や攻撃側に著しく不利な土地を奪取するのは必ずしも成功せず、このことが連合国の作戦立案者たちに明示されたのは重要なことであった。ノルマンディー海岸はこの要件をほぼ満たしていたが、オマハ・ビーチを見下ろす崖が唯一、地理的に大きな障害となった。

せていた。ジョージ・マーシャル将軍（陸軍参謀総長）は1942年5月から6月にかけてのガザラの戦いでロンメルに大敗を喫したイギリス軍に増援するため、多数のアメリカ軍の最新型戦車をエジプトに輸送した<sup>16</sup>。またアメリカはほぼ同時期に、独伊軍の大規模な空襲からマルタ島を死守するイギリス軍を支援するため、航空母艦1隻を派遣し、スピットファイア戦闘機を甲板から発進させた。さらに1943年4月半ばから7月までの期間にも、アメリカ軍はイギリス海軍の本国艦隊に戦艦「サウスダコタ」を「貸与」した。

しかしアメリカ軍参謀本部はフランス領北アフリカへの大規模な急襲に関して強硬に反対した。参謀本部は7月、語気の強い覚書をルーズベルトに送付して意見を表明し、アメリカが「ドイツ第一主義」戦略から太平洋戦略へと移行するよう要請した。しかしながらルーズベルトは返信の中でこの要請への不快感を直ちに表明し、アメリカは戦略を転換しないことを強調した。軍の指揮官たちとのやりとりで彼が「最高司令官フランクリン・ルーズベルト」と署名するのは稀なことだったが、この時の返信にはそう記されていた。メッセージの真意は明白であり、すなわち、アメリカ軍はイギリスと協力して北アフリカ上陸作戦に関与するということであった。それは覚書ではなく命令だった。

大局的に見て、この動きは連合軍側に大きな戦略的利益をもたらした。独伊軍がイタリア本土とシチリア島から大規模な戦力を移動させる前にチュニジア攻略を失敗したことは、長期的には大きな利益を生んだ。連合国は陸空軍の増援を受けて、1943年5月にチュニジアで枢軸国を大敗させることができた。このときの捕虜の人数や物的被害は、ドイツ軍がスターリングラードの戦いで被った損害に匹敵したほどである。同じく重要なこととして、1943年2月にロンメルによるカサリーヌ峠の攻撃を受けたことで、アメリカは戦場での効率性においてドイツ軍に大きく遅れをとっていると痛感した。1943年7月のシチリア島上陸・奪取によって地中海が開放され、約400万トンの貨物輸送が可能になったため、連合国は世界規模の兵站問題の圧力から、かなり解放された。

しかし最大の成果は、チュニジア・地中海戦線のために連合軍司令部が設置されたことである。そして第一次世界大戦で従軍経験のない、比較的若手の将官であったドワイト・アイゼンハワーを司令官に起用したのは名案であった。作戦指揮官としてのアイゼンハワーにどんな欠点があったにせよ（実際、一部の軍事史家が指摘するほど重大な欠点ではなかった）、彼は連合軍司令部の設置・運営に天才的な手腕を発揮し、彼が任命した連合軍将校の能力を最大限に引き出すことができた。その上、甚だ自己中心のかつ多種多様な軍司令官たちを指揮するに当たり、アイゼンハワーは何よりも協力姿勢が求められ

<sup>16</sup> Andrew Roberts, *Masters and Commanders, How Four Titans Won the War in the West* (New York, 2009), pp. 200-201.

ることを明確にした。彼はアメリカ軍のとある将校が別の将校を「この野郎」と罵ったからではなく、「このイギリス人野郎」と罵ったという理由で本国に送還させたとされている。

マーシャルが 1942 年夏の時点で主張していたように、地中海戦線に参戦すると、1943 年に北欧侵攻を開始するのがほぼ不可能であることが次第に判明してきた。実際、マーシャルは 1943 年 1 月のカサブランカ会談で、アメリカ軍は 1944 年まで北欧への上陸作戦を支援する態勢が整わないことを率直に認めた。この表明は 1942 年秋にワシントンで、一流のエコノミストと兵站将校たちの意見が大きく対立した結果に基づいており、この論争の中で兵站将校たちは 1943 年の上陸作戦のための戦力構成の準備を強硬に推し進め、アメリカ経済全体に被害が及ぶという理由から 1943 年どころか 1944 年になっても準備が整わない可能性があるとして激しく抗議した<sup>17</sup>。

地中海での戦いにより、英米両軍は連合作戦および統合作戦分野での協力について多くのことを学んだ。アメリカ軍はカサリーン岬での敗北をもたらした混乱ぶりから、イギリス軍の上級将官にひどく軽蔑された<sup>18</sup>。イギリス軍はたとえアメリカ軍が修練能力の高さを証明しても、自分たちの優越意識を完全に失うことはなかった。事実、イギリス軍は 1944 年まで他の連合国をはるかに凌ぐ地上戦闘能力を獲得していた。無論、イギリス軍の指揮官たちは第二次世界大戦初期の自国軍の愚行を忘れ去っていたが。

1943 年 1 月に開かれたカサブランカ会談での協議を経て、同年 7 月にシチリア島とイタリア本土を対象に限定作戦が実施され、フランス進攻を 1944 年春まで延期することが合意された。シチリア島上陸・征服を目指したハスキー作戦で、モントゴメリー将軍は上陸後の英米軍による地上作戦に向けた全般的指示を与えた。モントゴメリーがアメリカ人の感覚をほとんど考慮に入れなかった結果、パットン将軍はパレルモへの軍事進攻を大々的に発表して（さして軍事的効果のない）実行に移した。残念ながら、モントゴメリーには連合国の海空軍に対する指揮権はなく、彼はシチリア島内のドイツ軍を掃討する最善の方法について賢明な助言を積極的に与えることもしなかった。つまり彼は完全に地上戦の観点だけで考えていた。他方、アルジェの軍司令部にいたアイゼンハワーにもこれ以上の大規模な作戦を指揮する権限はなかった。そのためシチリア島のドイツ軍は大きな損害を被ることなくイタリア本土に脱出することができ、1943 年秋以降、サレルノ上陸作戦では連合軍に甚大な被害を負わせ、ナポリ以北への英米軍の軍事進攻を阻むことに貢献した。

連合軍の軍事進攻が冬のイタリアの雨と泥濘の影響で停止した頃にはすでに、英米

<sup>17</sup> これに関する考察は、James G. Lacey, *Keep from All Thoughtful Men: How U.S. Economists Won World War II* (Annapolis, MD, 2011) を参照。

<sup>18</sup> イギリス軍はノルウェー、フランス、ギリシャ、クレタ島、北アフリカでの軍事的惨状を早々と忘却して、入隊後 1 年未満で訓練不足のアメリカ軍よりも自分たちが劣っていることを全く感じていなかった。

軍の多くの部隊はフランス西部沿岸への大規模な上陸作戦に備えて地中海から配置転換されていた。1944年春に上陸するという決定は、ほぼ完全にアメリカの政治・軍事指導者の主導でもたらされた。チャーチルとアラン・ブルック陸軍元帥は、作戦開始までオーバーロード作戦（ノルマンディー上陸作戦）に極めて懐疑的であったばかりか、北イタリア上陸作戦を支持し（仮に遂行されれば行き詰まったであろう）、アンヴィル作戦という南フランス上陸作戦を阻止するよう躍起になった。アンヴィル作戦は、西部戦線を指揮する上での兵站及び戦力構成の諸問題の解決に不可欠な作戦であったことが明らかになっており、これは1944年11月にバーナード・ロー・モントゴメリー陸軍元帥がアントワープとスヘルデを解放するまで続いた<sup>19</sup>。

結局のところ、オーバーロード作戦が史上最大の連合・統合作戦となった。アイゼンハワー最高司令官の最も重要な任務は、自己主張が強くバラバラになりがちな部下たちを同じ目標の下に束ね続けることであった<sup>20</sup>。上陸作戦の決行直前にもかかわらず、アイゼンハワーと彼の有能な副司令官であるテッダー空軍元帥は、連合空軍がベルギーとフランス西部の交通網を空爆する必要性をめぐり、爆撃部隊の指揮官であるアーサー・ハリス空軍元帥及びカール・スパーツ將軍と激しい口論を交わす羽目になった。ハリスもスパーツも空爆への協力を望んでいなかったため、アイゼンハワーは仕方なく彼らの政治上の上官であるチャーチルとルーズベルトに対し、重爆撃部隊の指揮官にオーバーロード作戦への援護を命じるようわざわざ懇願しなければならなかった。

アイゼンハワーの地上軍副司令官を務めたモントゴメリーは有能な職業軍人であったが、周囲との付き合いが非常に不得手であった。これはアメリカ軍地上軍司令官のオマール・ブラッドレーとの関係で顕著となった。モントゴメリーは同じ地上軍の部下（とりわけアメリカ人将校）に対して作戦計画を明かすことに難色を示したため、部下たちは困惑し、盛んに陰口をたたいた。北方から進軍したイギリス軍とポーランド軍によるファレーズ包囲は失敗したものの、8月初めのアヴランシュ突破により英米間の摩擦や衝突は一時的に鎮静化した。

しかし、アイゼンハワーが抱えた作戦上の最大の難問は、連合軍によるドイツへの全面的な軍事進攻を決断したときに起こった。モントゴメリーは、北ドイツ戦線への大規模攻勢を望み、アメリカ軍に側面支援をさせて、イギリス軍が物資供給の大半を受け取るよう求めた。当然ながらアメリカ軍はモントゴメリーとイギリス軍が戦果と栄光を独占することに激怒し、パットンとブラッドレーはともにアメリカ軍がドイツ軍事進攻の主力を担うよう

<sup>19</sup> スヘルデ河口を通過した最初の船は、1944年11月28日ようやく積み荷を降ろし始めた。

<sup>20</sup> この作戦の性格と困難さについては、Williamson Murray and Allan R. Miltett, *A War to Be Won Fighting the Second World War* (Cambridge, MA, 2000) を参照。

要求した。

アイゼンハワーは、一方の軍のみが脚光を浴びるといふ結果を招くこのような考えを持ち合わせていなかった。むしろ彼は英米両軍がヒトラーの第三帝国を壊滅させるために全面的に関与できないとなると、英米両国の国民の政治的同意が得られないことを理解していた。今振り返れば、アイゼンハワーの見解は完全に正しかったといえる。なぜならクラウゼヴィッツが強調したように、戦争とは政治目的を果たすために行われるものであり、全軍的な軍事進攻というアプローチは作戦としては決して最善の選択ではなかったかもしれないが、政治的に見れば間違いなく最善の選択だった。同盟というものが本国の政治的支援に依存していることを忘れてはならない。

## 統合作戦

英米両軍にとって、最初の数年間の統合作戦は極めておぼつかないものであった。あいにく統合作戦の軍事環境への適応プロセスは、長く険しいものであった。これは日独両軍の軍事組織でも同じであり、この戦争が提起した諸問題に適応すべく、技術能力や戦術・作戦面のアプローチを変化させたからである<sup>21</sup>。太平洋戦争に関しては、アメリカ海軍と海兵隊が開戦前にすでに水陸両用作戦の戦略的アプローチや軍事ドクトリンを策定していた<sup>22</sup>。陸軍は最終的にこれに従った。実際、タラワの戦いを皮切りとしたアメリカ軍の大反攻においては、軍事行動を重ねるたびに変革や新たな戦術判断が求められた。

南太平洋方面のダグラス・マッカーサーも同様に、アメリカ海軍と海兵隊が中部太平洋方面で実行した軍事行動とは全く異なる新たな代替行動を迫られることとなった。これは主に戦域の地理的特徴に起因したもので、陸地面積が広いニューギニア島では、マッカーサーは地対空戦力を活用できた。また傘下の陸軍航空軍は第二次世界大戦の英雄の一人であるジョージ・ケニー将軍の指揮下にあった。しかしながら広大な太平洋を横断した水陸両用作戦という性質上、陸海空軍の統合運用が求められた。日本軍が太平洋戦争を開戦してから2年間でこのことを把握できなかったのは、日本が敗北した大きな要因のひとつである。これに関し、太平洋戦争中に陸軍と海兵隊が協力できずに激しく対立したという話は、完全なる誤りである。むしろ両軍種はわずかな例外を除き戦場でも戦闘後の教訓

<sup>21</sup> 戦争中の適応がもたらす諸問題に関する考察は、Williamson Murray, *Military Adaptation in War, For Fear of Change* (Cambridge, 2011) を参照。

<sup>22</sup> 戦間期のアメリカの戦略及び作戦構想の策定については、とくに Williamson Murray, "U.S. Naval Strategy and Japan," Williamson Murray and Richard Hart Sinnreich, *Successful Strategies, Triumphant in War and Peace from Antiquity to the Present* (Cambridge, 2014) を参照。

を学ぶ局面でも効果的な協力関係を築いた<sup>23</sup>。

他方、欧州戦線では状況が異なっていた。1939年9月にイギリスが参戦した時点で、陸海空軍は軍種間協力にはほとんど、あるいは全く関心がなかった。イギリス空軍はドイツへの戦略爆撃の開始を求めたが、地上戦で陸軍と協力することには全く関心を示さず、また海軍への対潜水艦戦のための援護は優先順位が最も低かった。イギリス海軍は、戦争前の水陸両用作戦の演習に対し軽蔑しか示さず、陸軍は水陸両用作戦など過去の遺物だと考えていた。大きな損害を生んだノルウェーの戦いの過程で、イギリス軍が統合作戦の準備を全く整えていなかったことが明らかとなった。

北海沿岸の低地諸国及びフランスでの悲惨な戦況を受けて、イギリスは軍種間協力を真剣に検討せざるを得なくなった。しかしそれは、長く時間のかかるプロセスになった。1942年になってようやく、イギリス空軍は対Uボート戦に必要な資源を提供し始めた。1942年8月にモンゴメリーが陸軍第8軍司令官に就任して初めて、イギリス空軍と陸軍は実効的な協力体制を構築した。無論、この協力こそが1942年10月のエル・アラメインの戦いでイギリス軍に勝利をもたらす大きな要因になった。イギリス空軍と陸軍が身をもって体得した教訓のおかげで、アメリカ軍はチュニジアの戦いで陸空軍協力の活用方法を迅速に学習することができた。

1942年11月の北アフリカ上陸作戦においては、英米軍の水陸両用作戦に関する認識不足が露呈した。とくにイギリス軍はシチリア島で初めて、効果的な敵前上陸作戦の遂行に伴う複雑性を完全に理解することができた。イギリス軍がシチリア、サレルノ、アンツィオで得た教訓は、後のノルマンディー上陸作戦の成功に大いに寄与することになった。

しかしイギリス軍は、ディエップ上陸作戦において手痛い教訓も学んでいた。それゆえモンゴメリーと海軍の軍事顧問たちは、1944年6月6日のオーバーロード作戦におけるゴールド・ビーチ、ソード・ビーチ、ジュノー・ビーチへの上陸作戦において、海軍の地上砲火による十分な援護射撃を確保した。さらにこの援護射撃は実に2時間近く敵軍の注意を引きつけ、ドイツ軍がノルマンディー沿岸に築いた護岸や町沿いに構築した近接防御兵器を撃破することにつながった。他方、残念なことに、イギリス軍が歩兵、砲兵、装甲部隊による諸兵科連合作戦の遂行能力を欠如していたことは、第二次世界大戦を通じて大きな障害となった。1944年から45年にかけてのフランスやドイツでの戦いでさえ、イギリス陸軍は様々な戦闘部隊を諸兵科連合作戦のための効果的な統一体として機能させるのに

<sup>23</sup> 両軍の関係の綿密な再検討については、Sharon Tosi Lacey, *Pacific Blitzkrieg: World War II in the Central Pacific* (Dallas, TX, 2014) を参照。

非常に苦勞した<sup>24</sup>。

アメリカ軍は欧州での水陸両用作戦で目立った戦果を挙げなかった。アメリカ軍はシチリア、サレルノ、アンツィオの上陸作戦でイギリス軍と同じ教訓を学んでいたものの、ノルマンディー上陸作戦を計画・実行したアメリカ軍は、危うく作戦全体を破綻させるところだった。最大の元凶は、オマール・ブラッドレー将軍が海軍を過小評価し、オマハ・ビーチ沿いのドイツ軍の防御射撃を阻止するための艦砲射撃に協力する意志を見せなかったことである。彼は 20 分間の艦砲射撃と第 9 空軍の中型爆撃機による空爆で十分だと考えていた。その結果、水陸両用作戦を援護するアメリカ軍の戦艦は、ノルマンディーのオマハ・ビーチとユタ・ビーチに 1 隻ずつの計 2 隻にすぎなかった。

こうしたブラッドレーの海軍援護射撃に対する無関心かつ無責任な態度は、ノルマンディー上陸作戦の策定において、マーシャルがチャールズ・コレット少将に、太平洋戦争での経験を基にブラッドレーに助言するよう指示していたことと関係している。コレットは、1944 年 1 月から 2 月にかけてのクェゼリン上陸作戦で第 7 歩兵師団を指揮しており、この作戦では海軍による援護射撃のため 7 隻以上の戦艦が参加した。コレットはこの経験をマーシャルに報告した後、欧州戦線に派遣された。コレットは、当時策定中のノルマンディー上陸作戦を入念に検証し、ブラッドレーを含めた計画立案者らに海軍の艦砲援護射撃が全く足りないことを警告した。しかしブラッドレーはこの忠告に耳を貸さず、それどころか「二流の戦域（である太平洋の戦い）から果たして何を学べるのか」といった趣旨の発言をした。その結果、アメリカ軍はオマハ・ビーチで甚大な損害を被った。仮にオマハ・ビーチへの上陸が失敗していたら、オーバーロード作戦全体の失敗につながったかもしれない。

## 結論

第二次世界大戦中の英米軍の経験から、現代世界の私たちは連合・統合作戦に関する数多くの有益で重要な教訓を学ぶことができる。それは恐らく中国の大思想家である孫子の故事「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず」から、最も重要な結論を引き出すことができよう。この故事を私なりに補足するならば、連合作戦では同盟国の軍事力、作戦概念、特長や弱点といった「同盟国を知る」ことが不可欠である。同様に、統合作戦においては、作戦遂行に携わる者は、自分と異なる軍種または戦域で経験を積んできた相手であれば、統合作戦の戦術・作戦上の要求について異なる認識を有することは避けられないと理解すべきである。

---

<sup>24</sup> 本件に関し、一つの例外が存在するが、欧州での戦いで該当するものはなかった。大英帝国の多数の部隊から構成されたスリム将軍率いるビルマの第 14 軍だけがこの原則の例外であった。

どちらの場合も、容易な問題ではない。連合作戦では、軍司令官だけでなく政治指導者も、同盟国の戦略的狙いのみならず、彼らの世界観 (*Weltanschauung*) や歴史、世界を見る上での戦略的枠組みに対して、深い理解を持つことが求められる。実際、英米同盟の歩んだ軌跡が完璧であったとは言い難い。英米両国の指導者は連合戦略の策定は厄介で見通しが立たず、論争を招き、まさに戦争意志と世界観の闘争であると認識していた。しかし最終的には、その戦略策定プロセスこそが第二次世界大戦での勝利をもたらしたのである。このことが連合戦略・作戦を策定する上で何よりも重要であったと考えられる。

同様に、統合作戦軍の指揮官・参謀や陸海空軍の個々の指揮官たちも、統合作戦を遂行する軍人の置かれた環境、概念、教義を理解しなければならない。この理解を達成するためには以下の3つの方法が存在する。第一に、平時において、厳しい訓練を実施すること、第二に、軍事史を重視した専門的な軍事教育を施すことである。そして第三の方法——戦争中に大半の軍隊が実践した方法——、すなわち平時における上記の2つの方法を無視して、戦場で犠牲者を出しながら学ぶという方法である。

